

鴨東通信

夏

おうとうしん

ていーたいむ

真偽ではなく豊かな解釈を
出光佐千子・松本郁代

■私のノートから■

「蝦夷地」を体験する北海道への旅
新藤透

特別寄稿

神社史料研究会叢書について
橋本政宣

史料探訪③7

ブリキのおもちゃ——「小菅のジープ」——
松浦俊和

■源氏物語千年紀・古典再生に向けて〈第八回〉■

王朝文化を今に伝える古筆切
田中登

◎新刊案内◎

風俗絵画の文化学

神社継承の制度史

立憲国家中国への始動

松前景広『新羅之記録』の史料的研究

キリシタン大名の考古学

九州の蘭学

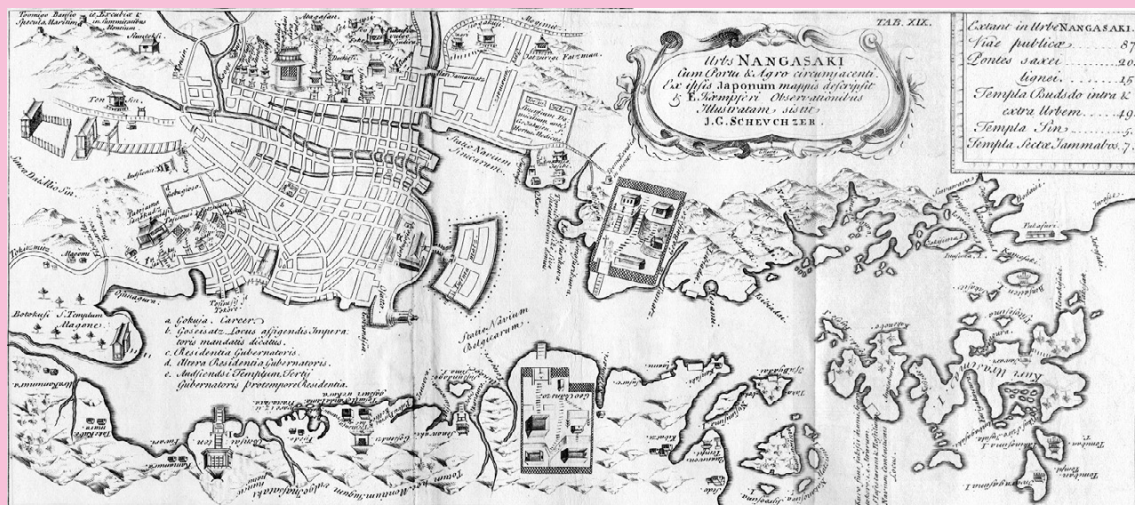
花園院宸記 第18回配本

武野紹鷗 わびの創造

江月宗玩 欠伸稿訳注 乾

尾陽 5

禅語辞典 (7刷)



真偽ではなく豊かな解釈を

出光佐千子（出光美術館学芸員）

松本 郁代（横浜市立大学准教授）

■セインズベリーでの出会い■

出光：私と松本さんとの出会いは、ロンドン大学の宗教史のシンポジウムで松本さんの研究発表を聞いたことに始まります。そのころ、二人ともロンドン大学のセインズベリー日本藝術研究所へ留学しており、松本さんは歴史学、私は美術史学と専門は違いましたが、親しく話をする中で、お互いの専門性に惹かれ合いました。

松本：出光さんにある時、「歴史の人は美術を事実が描かれたものとして見ようとしているのはなぜ？」ということ聞かれました。歴史学から美術作品を扱う場合、事実とどのような相互関係があるのかとか、権力者や制作者との関係とか、さまざまな解釈方法があるのですが、始めから芸術作品として見ることはあまりありません。美術史では、作品を始めから作品として見ていますから、それが史実を表したのかそうではないかというのにはあまり関心が及ばず、作品論として様式の問題などが中心に論じられていますね。見方が違うんだね、ということにお互い気づき始めて、そこから今回刊行する『風俗絵画の文化学』の母体となった風俗絵画研究会が発足しました。

出光：第1回目が2005年8月で、以後夏と冬の年2回の研究会を行ってきました。

松本：研究会は、立命館大学アート・リサーチセンターの「オープン・リサーチ整備事業」のサブプロジェクトとして位置付けられ、2007年度からは立命館大学グローバルCOEプログラムのサブプロジェクトとして活動しています。

■白黒ははっきりつけない■

出光：ロンドン大学の授業を聞いていて感じましたが、向こうの大学の先生は、日本の絵を見ながら、そこに何が描かれているか、どういう風に見えるかということを生徒に問いかけるんですね。絵は日常生活をある程度リアルに描くものという前提でビジュアルカルチャーの授業を教えていて、それが私

には新鮮でした。どちらかというと日本の美術史というのは、描かれているものは虚構であって、そのまま描かれているものの方が少ない、という見方です。松本さんと話をするなかで、歴史をやっている人たちも、描かれている事実をもとに傍証として絵を使うというやり方をされていることがわかり、絵というものをいろんな専門家がどのように使っているのだろうというところに興味がわいてきたのです。

松本：今言われた虚構も、全てが虚構ではなくて、その時代の何らかの反映が入っているわけです。本書の序章で、風俗画は当世風のメディアであった、という書き方をしました。虚構だけれども、そのなかには事実やその時代の風潮というのが必ず描かれていて、それをどういうふう豊かに解釈していくか、そこに学問としての面白みがあると思います。いろんな専門を持った人たちの目を入れることで、さまざまな解釈の可能性が生まれてきます。

出光：美術史だけで知ることのできる知識と、歴史・宗教・地理・文学から見た場合で違った答えが出てくるのは当然ですね。洛中洛外図の制作年代や作者に関して、歴史学の今谷明先生や黒田日出男先生と美術史の立場との大論争がありましたが、そのように白黒ははっきりつけようというふうには私たちは思いません。むしろ、曖昧性の中にいろんな視点を出していきたいと思っています。お互いの方法を認め合い、いいところを吸収したい。お互いに常識が違うので、おかしいと思うところもたくさんありますが、そういうこともわかった上で、異なる分野の人たちが一緒に集まれば生まれるものがあると思います。

■美術史から教わること■

出光：風俗画を研究対象にした場合、美術史の問題というのは、どうしても「いい作品」を中心にしてしまうということです。下手なものは贋物かもしれないということで排除してしまったり。そこに特殊な情報が入っているかも知れないけれども、そこは

まあ置いていて、という話になっていく。だから風俗画研究が中心になってこないんですね。国宝に指定されているような美しいものや、美しくなくてもすごく面白いとか変わっているように描かれているものを取り上げて、どうしてこういうふうに描いたのか、というところから入って行って、いろんな史料に当たって、最終的にはまたその絵に戻っていく。やはり絵としての魅力があるものを中心になってしまいます。

松本：そこは歴史学とは決定的に違う点ですが、美術史から教わることは非常にたくさんありますね。例えば出光さんの専門である文人画は、私からすると、すごく難解そうに見えますが、それが出光さんの立場で見ると、池大雅の文人画は、「雅」である中国名勝の景観を用いて、日本の現実的な「俗」なる景観描写を描いた、ということになって、絵画描写そのものを大きな歴史的な枠組、文化交流の枠組で見ることができるわけです。このような見方ですと、分析対象は必ずしも文字テキストだけではなく、絵画そのものをダイナミックな資料としてとらえることができますし、部分的に描かれているものだけではなく、絵画の存在意義そのものをとらえることができる、と感激しました。資料をつかむヒントをもらいましたね。

■風俗画研究の可能性■

出光：ただ、研究会が最初からうまくいっていたわけではなかったですね。当初は意図的に、美術史の人にはこゝてこゝての美術史っぽい発表をしてもらい、歴史の人にも歴史学の立場からの発表をとという感じで、方法論を戦わせたこともありました。

松本：言いあたり、気まずくなることもありましたね。

出光：いつの頃からですかね、方法論を戦わせるのは無意味だと気づいたのは。

松本：回を重ねる毎に成熟してきたと思うのですが、その意味で重要なのが、本書第4部に収められた諸論考のような観点です。

出光：彬子女王殿下には、研究会発足当時から参加していただきました。風俗画という概念の歴史的な変遷をたどり、その曖昧性を指摘しています。

松本：前崎信也論文では、明治初期の万国博覧会で展示された日本陶磁器とその風景写真との関係をめぐって、写真の恣意性やイデオロギー性を明らかにしています。写真すら真実を写していないという指摘は衝撃でした。研究会の最初の頃は、批評的な立



左：松本氏 右：出光氏

場から方法論や物の見方について指摘されると、非常に戸惑った面はありました。ところが実際に発表をしていただくと、なるほどな、全ては人によって作られた概念だったんだ、あるいは歴史的な状況に左右されてきて今に至る概念を私たちはそのまま使っていたんだ、ということに気づかされました。時代に限定する、あるいは分野に限定するというのではなくて、結局、学問体系というものは、循環できるものではないかと思ったのです。もちろん専門は専門で大事にしないといけないのですが、お互いの違いについてただ意見を戦わせるのではなくて、お互いの立場を循環させるというのも大事なことなんだとわかりました。

出光：研究会には海外の方も多く参加されています。海外の方が参加しやすいように、研究会は夏と冬に行います。

松本：世界で日本美術史研究というのが行われていますが、国によって学問のあり方が違います。いろんな国のいろんな事情を踏まえた上での学問のスタイルを大事にしないといけないと思います。そこら辺をしっかり教わりながら、文化「学」として、学問の多様なあり方というのをまずは知る。結論は一つでなくてもいいし、誰が正しくて誰が正しくないというような真偽の判定も、別のところではすごく大事なものですけれども、私達のような形での研究のスタイルもあっていいのではないかと思います。次の研究会では、文化人類学の方が、浮世絵に描かれた外国人を中心に分析しますし。絵画は何も美術史学の対象だけでもないし、解釈の可能性も造形的なものだけに限られません。人を対象とする領域の学問であつたら扱える、いろんな見方が投影されているものです。そういう意味でも風俗画は異なる専門分野をもひきつけてゆくさまざまな可能性を秘めているのではないかなと思います。

(2009.5.29 於：出光美術館)

風俗絵画の文化学 都市をうつすメディア

松本郁代・出光佐千子編

【最新刊】

中世から近世における風俗絵画のメディア性に着目し、様々な視点からアプローチする。歴史学・美術史学・文学・宗教史学などの多岐にわたる分野の専攻者がその分析にいとむ13篇。カラー口絵4ページ、本文には図版を多数掲載。

序章 巨視と微視の文化学

(松本郁代)

第一部 場の記憶

「清水寺参詣曼荼羅」試論

(上野友愛)

中世京都・東山の風景

(下坂 守)

「北野経王堂」と「諏訪の神事」

(マシユ・マッケルウェイ)



「京洛月次風俗図巻」(立命館大学アート・リサーチセンター所蔵)

▶A5判・370頁／定価6,825円

第二部 聖俗の描写

中世における職人絵の登場

(松本郁代)

近世風俗絵画のなかの節季候

(川嶋將生)

池大雅が描いた都市景観と風俗表現

(出光佐千子)

第三部 伝承の変化

「根来」と根来塗

(源城政好)

立命館大学ARC所蔵「東山名所図屏風」の主題考察

(金子貴昭)

江戸の劇場図

(松葉涼子)

風俗《曲水宴図》の思想と変容

(亀田和子)

第四部 解釈の創出

「風俗画」再考

(彬子女王)

写真は真を写したか

(前崎信也)

中国における『清明上河図』研究の現状と課題

(張 建立)

内容目次

ISBN978-4-7842-1469-3

翁の生成 渡来文化と中世の神々

金 賢旭著

林屋辰三郎芸能史研究奨励賞受賞!!

本書では、中世の翁信仰の生成過程を諸縁起や史料から読みとることによって、そこに色濃く反映された韓半島からの渡来文化の姿を見だし、さらに日本芸能のルーツである翁猿楽の成立についても韓半島のシャーマニズム文化の影響を指摘する。

日本と韓半島との文化交流の、中世における新たな相貌を浮かび上がらせる意欲作。



▶A5判・250頁／定価5,250円 ISBN978-4-7842-1411-2

近世御用絵師の史的研究

幕藩制社会における絵師の身分と序列

武田庸二郎・江口恒明・鎌田純子編

「御用絵師」という画業を生業としていた人々が、全国的官位官職制度の中にいかに組み込まれていたか、また為政者の組織編成の仕方、掌握方法、自身の身の処し方を解明する。

▶A5判・458頁／定価7,875円 ISBN978-4-7842-1392-4

祈りの文化 大津絵模様・絵馬模様 信多純一著

江戸時代から近江大津追分にて作られ、手軽な土産として全国の人々に愛された民画・大津絵。新考察を加え、多数の図版とともに解説した全大津絵の事典。

▶B5判・170頁／定価3,675円 ISBN978-4-7842-1425-9

権者の化現

天神・空也・法然

今堀太逸著

〔佛敎大学鷹陵文化叢書15〕

日本国の災害と道真の霊・六波羅蜜寺の信仰と空也・浄土宗の布教と法然伝の3部構成で、仏・菩薩が衆生を救うためにこの世に現れた仮の姿について明かす。

▶四六判・312頁／定価2,415円 ISBN4-7842-1321-X

京都文化の伝播と地域社会

源城政好著

〔思文閣史学叢書〕

京都とその近郊の中世文化史に取り組んできた著者が、今までの成果をまとめた一書。

▶A5判・400頁／定価8,190円 ISBN4-7842-1325-2

周縁文化と身分制

脇田晴子／M・コルカット／平 雅行編

かつて克服の対象としか見なされなかった前近代社会を近代化の呪縛を脱した地平から見直し、新たな前近代社会像を多面的に浮き彫りにする12篇。

▶A5判・350頁／定価5,775円 ISBN4-7842-1231-0

祭りのしつらい 町家とまち並み

岩間 香・西岡陽子編／京極 寛写真

祇園祭・天神祭をはじめ、城端(富山県)や倉敷など各地の祭り飾りや造り物などをとりあげ、町家とまち並みを飾る祭りの文化を紹介。カラー60頁。

▶B5判・224頁／定価2,310円 ISBN978-4-7842-1360-3

「蝦夷地」を体験する北海道への旅

新藤 透

大学三年次に自動車免許を取得してからも、公共交通機関を利用してきた。去年首都圏から移住し山形県民となったが、運転をしないままに一年が過ぎてしまった。

それでも日常生活は（冬季をのぞいて）それほど困ったことはない。しかし、問題は史料調査の時である。

北海道を研究のフィールドに決めたのは大学院のときであったが、以来十年間毎年のように訪れている。道内でまとまった量の史料を所蔵している機関は札幌周辺と函館に集中していて、こういった都市部は交通機関が発達しているのでまったく問題はない。だが、かつて松前藩の城下町であった松前や、港町江差、中世に和人とアイヌが混住していたという勝山館がある上ノ国に行こうとなるとそう簡単にはいかない。レンタカーで効率良く回ることができればよいのだがそれができず、毎年一か所ずつ順番に訪ねていった。

まだ関東にいたころ、最初に訪ねたのは松前である。羽田から飛行機を使えば一時間半ほどであるが、あえて電車で北海道に渡ることにした。東北新幹線と特急スーパー白鳥を乗り継ぎ、青函トンネルを抜けるといよいよ北海道である。道内の最初の停車駅木古内（きこない）に降りたときは感慨深いものがあつた。木古内から松前まではバスである。木古内での接続がうまくいけばいいが、下手をするとき一時間ほどキオスクしかない駅の待合所で待たなければいけない。

ようやく来たバスに揺られながら何気なく外を見てみると、そこには津軽海峡が広がっていた。よく晴れた日

には対岸の本州までも見えるという。

松前城、歴代藩主墓所、寺町、沖の口奉行所跡地といった松前の主要な史跡は松前城近辺に密集しており、半日もあればすべて回ることができる。今は静かな城下町であるが、江戸時代の松前は蝦夷地最大の都市であり各地から訪れていた人々で賑わいをみせていたに違いない。

当時の蝦夷地への交通手段は船と徒歩である。江戸からの旅行者は本州をひたすら北上し、津軽半島から松前まで船で渡るのが一般的であつた。おそらく旅人は北に行くに連れ、生まれ故郷とは異なる空気を肌で感じながら、蝦夷松前という土地がいかに本州とは隔たった遠隔地であるのかと実感をしたことであろう。

電車での旅ではあるが、筆者も徐々に変化する車窓の風景を眺めながら、まだ見ぬ北の大地へと思いを馳せていた。関東では密集して住宅が建てられているが、雪国では家と家との間隔が離れて建てられており、また屋根も瓦葺きからトタンへと変化していった。そうした変化を目で見て確認をしながら、遠くまで来たのだと改めて思ったものだった。また電車やバスでたまたま乗り合わせた地元の人たちの話す方言を聞くと、北海道に来たのだなと肌で感じることもできたのである。

蝦夷地までの旅行記というものは幕末を中心にして結構な数が今日まで残されているが、ただ文字を追うだけでは江戸時代の旅人の感覚はよく分からないものである。江戸―松前間は一か月程度を要したが、知識として徒歩でそれほどかかるとは知ってはいても、やはり一時

間ほどで羽田から新千歳や函館に降り立つことができる現代人では、あの「遠さ」は味わえないのである。

史料を読む上で歴史研究者が心がけなければならないことはいくつかあると思うが、筆者が最も気を付けている点は、なるべく当時の人の感覚で解釈をすることである。「現代人の感覚」で史料を読めば思いもよらぬ誤読をしてしまう可能性もある。蝦夷地の「遠さ」が分からなければ、そこに描かれているアイヌ民族のことも、対露認識のことも、松前藩主が他大名から「エゾ大王」と陰口を叩かれていたことも、ほんとうの意味では理解できないと思うのである（あくまで「和人」側の視点ではあるが）。

歴史学研究はいまでもなく文献を扱う分野であるが、ひとり部屋に閉じこもってひたすら史料と格闘すれば良いというものではない。その史料に登場する土地に足を運ぶことが重要だと思う。そして時間が許せるならば飛行機や自動車を使用せず、電車やバスで移動した方がよい。そうすれば江戸時代人の感覚が少しでも追体験できるはずである。北海道は近くなったが、かつての蝦夷地はあまりにも遠い未知の土地であつたはずである。



しんどう・とおる

1978年埼玉県生。筑波大学大学院博士後期課程図書館情報メディア研究科修了。博士(学術)。現在、山形県立米沢女子短期大学国語国文学科専任講師。専攻は図書館情報学、日本近世史。共著に『北東アジアのなかのアイヌ世界 アイヌ文化の成立と変容』下巻（岩田書院、2008年）。



尹日記」(文政八年～天保十五年、八冊、全撮)、「伏見稲荷大社旧社職目代家日記」(寛文五年～明治二十一年、一〇二五冊、うち宝永元年まで四八冊分撮影)、「賀茂別雷神神社日記」(寛文五年～明治二十一年、一〇二五冊、うち元文五年まで八四冊分撮影)、上賀茂社家の「清令日記」(寛文六年～宝永八年、三八冊、全撮)、同「清茂日記」(元禄五年～享保二十年、四二冊、全撮)、同「清足日記」(寛保二年～安永六年、五二冊、全撮)であり、いずれも原本である。これらにつき対処すべきは、第一には十全な保存の処理を構ずること、第二には史料学的研究を行ない、その有効性を明らかにすることである。そして第三には各日記の本格的な研究を推進し深めることである。

このように、神社、社家などにはこれまで未調査であった史料が多く眠っていたことが知られるのであるが、前近代の史料が自然形で伝存しているわけではなく、明治元年の神仏判然令、そして同四年五月の神社はすべて国家の宗祀であること、神官はすべて世襲を廃し精選補任すべきことの布告により、これらの影響を掻い潜ったものであることを認識しておかねばならない。旧社家と神社史料は応々にして直接の結びつきも失っているのである。更にいえば、近世の神社史料は戦後の歴史学においてのみならず、それ以前の国家神道の時代においても、政策的な面からも重視されたわけではなかったといえる。その意味でも、神社史料の貴重性を謳い、本格的な研究に取り組むことは始ったばかりといえるのではないか。九牛の一毛にも過ぎないが、神社史料研究会叢書の第一輯～第五輯が刊行しえたことを慶びたい。

(神社史料研究会代表・東京大学名誉教授)

『神社継承の制度史』あとがきより抄録

神社史料研究会叢書【全5冊】 完結

V 神社継承の制度史

梶山林繼・宇野日出生 編 【最新刊】

古代より近代にいたるまで神社が継承されてきた諸問題について、主に制度史としての視点で論究した珠玉の論文9篇を収録。

◎内容目次◎

はじめに

名神の研究—神明思想の展開—

石清水八幡宮の祭祀と僧俗組織—放生会と安居神事をめぐって—

若狭彦神社の神仏関係

吉田兼右の神道伝授と阿波賀春日社

中近世移行期伊勢神宮周辺地域の経済構造

—外宮門前町山田と外宮子良館との経済的接点を中心に—

御棚会神事と賀茂六郷

近世初期における加賀藩の神社統制

—越中の神主触頭の任命をめぐる争論を中心に—

江戸時代における神職の身分確立への運動—梶山林忠大円寺奥印除き一件—

葬列としての頭人行列—信州武水別八幡宮の大頭祭夜練りをめぐって—

あとがき

▶A5判・340頁／定価7,875円

梶山林繼・宇野日出生

山本信吉 (元奈良国立博物館長)

西 中道 (石清水八幡宮禰宜)

嵯峨井 建 (賀茂御祖神社禰宜)

宮永一美 (福井県教育庁文化課文化財保護室主査)

千枝大志 (本居宣長記念館研究員)

宇野日出生 (京都市歴史資料館統括主任研究員)

鈴木瑞麿 (氷見市教育委員会生涯学習課副主幹)

梶山林繼 (國學院大学教授)

福原敏男 (日本女子大学教授)

橋本政宣 (神社史料研究会代表・東京大学名誉教授)

ISBN 978-4-7842-1418-1

神社史料研究会叢書について

橋本政宣

『神社継承の制度史』がようやく目の目を見た。神社史料研究会では、会員による研究発表を批判・討議し、成稿の論文を神社史料研究会叢書として上梓し、これまで第一輯『神主と神人の社会史』、第二輯『社寺造営の政治史』、第三輯『祭礼と芸能の文化史』、第四輯『社家文事の地域史』を世に送り、これが第五輯にあたる。当初計画したもののがこれで完結する。

かえりみれば、神社史料の各分野からの有効利用、研究の深化普及を目標として、神社史料研究会が発足したのは、平成六年（一九九四）十二月十一日のことであった。会員は四十八名。小生が代表を務めることになった。本会の名称が神社研究会ではなく、神社史料研究会となったのは、神社史料はたんに神社、神道の研究に資し、宗教史の素材を提供するにとどまらず、前近代における神社の位置づけからいって、地域史、政治史、社会経済史、文化史はいうにおよばず、文学、芸能、音楽、風俗、民俗等を初めとする広い分野に資する筈のものであり、神社史料ということに焦点を当てていこうという趣旨による。

爾来、十五年。会の発足当時においては、神社及び神社史料に関する研究、とくに近世分野における究明は、極めて希薄であったのみならず、一部には研究そのものを敬遠する傾向にさえあったように思われた。しかし、いまはどうか。状況は一変して、往々にして見られたところの神道、神社に対する偏見もあまり見られなくなつたし、研究も盛んになってきている。史料に則した実証的な研究も多く見られるようになっていて、隔世の感がある。まことに喜ばしいことである。

神社史料研究会叢書の五冊に収載した論文は、都合四十六本。本研究会においてこれだけの量の論文を積み上げてきたこと、各自が研究のテーマこそ異にするが、神社史料の有効利用と

いうことでは共通の認識をもちながら会を存続してきたことを喜び、また誇りとしたい。しかし、当初に目標にかかげたことは、まさに始まったばかりといわざるをえないであろう。近世の神社史料のなかでも、もつとも注目されていないのが神社、社家、神主の日記、総称して神社日記といふべきものであろう。かつて史料編纂所に在職中、平成三年から十年にかけて近世の社寺日記の調査にかかわり、所々に相当量の神社日記が伝存していることが確認された。近世の日記の特色として掲ぐべきは、原本として伝存しているものが極めて多く、かつ

I 神主と神人の社会史

橋本政宣・山本信吉編

神人の成立（山本信吉） 鴨社の祝と返祝詞（嵯峨井建） 中世、春日社神人の芸能（松尾恒一） 洛中日吉神人の存在形態（宇野日出生） 石清水八幡宮神人の経済活動（鍛代敏雄） 中世後期地方神社の神主と相論（東四柳史明） 戦国期鶴岡八幡宮の歴史的伝統と社務組織・戦国大名（横田光雄） 西宮夷願人と神事舞太夫の家職争論をめぐって（佐藤晶子） 寛文五年「諸社称宜神主等法度」と吉田家（橋本政宣）

▶A5判・320頁／【品切】

II 社寺造営の政治史

山本信吉・東四柳史明編

神社修造と社司の成立（山本信吉） 建武新政期における東大寺と大勧進（畠山聡） 金沢御堂創建の意義について（木越祐馨） 戦国期能登畠山氏と一宮気多社の造営（東四柳史明） 中近世移行期における寺社造営の政治性（横田光雄） 両部神道遷宮儀礼考（松尾恒一） 近世出雲大社の造営遷宮（西岡和彦） 諸国東照宮の勧請と造営の政治史（中野光浩） 近世における地方神社の造営（橋本政宣）

▶A5判・312頁／定価6,825円

ISBN4-7842-1051-2

III 祭礼と芸能の文化史

藺田稔・福原敏男編

神社廻廊の祭儀と信仰（松尾恒一） 相撲節会と楽舞（廣瀬千晃） 中世諏訪祭における王と王子（島田潔） 鹿島神宮物忌職の祭祀（森本ちづる） 越前志津原白山神社の祭礼芸能（宮永一美） 武蔵国幕閣大名領における祭礼の振興（藺田稔・高橋寛司） 近世鶴岡八幡宮祭礼としての面掛行列（軽部弦） 住吉大社における荒和太神の神事をめぐって（浦井祥子） 『伊曾乃祭礼細見図』考（福原敏男）

▶A5判・300頁／定価6,825円

ISBN4-7842-1159-4

IV 社家文事の地域史

棚町知彌・橋本政宣編

『守武千句』の時代（井上敏幸） 中西信慶の歌事（神作研一） 伊藤栄治・永運のこと（川平敏文） 中島広足と本居宣長（吉良史明） 伊勢御師の歌道入門（加藤弓枝） 北野宮仕（中）という歌学専門職集団の組織と運営の実態（資料編）（棚町知彌） 北野社家における歌道添削について（菊地明範） 近世における地方神主の文事（橋本政宣） 刊本『さ・ぐり』の成立（吉良史明） 連歌御由緒考（入口敦志）

▶A5判・340頁／定価7,875円

ISBN4-7842-1257-4

武士の精神と その歩み

A. ベネット著

武士道の社会思想史的考察

読売新聞5月10日読書面
「著者来店」コーナーで紹介



「現代の日本人は武士を美化しすぎる。生死について考えざるを得なかった緊張感、葛藤が考慮されていない。」

(著者のことば)

【内容目次】

- 第1章 武士エトスの系譜
- 第2章 象徴の体系
- 第3章 武士の「気風」と「動機」
- 第4章 武士の一般的な秩序
- 第5章 武術を通じての武士の
宗教的な体験
- 第6章 武士身分の解体と武士文化の活用
- 第7章 国民武士道の創造
—「サムライ魂」の再発見

▶A5判・296頁／定価5,040円

ISBN978-4-7842-1426-6

本よみり堂



■「武士の精神とその歩み」
アレキサンダー・ベネットさん

有段の外国人剣士は珍しくない。日本の精神文化を研究する外国人学究だつて大勢いる。だが、双方手がける大学の准教授ともなるとそうはいない。ロク、勤務する関西大学の道場で竹刀を振るいながら、武士道とは何なのかを追求め続けている。

初めて剣道と出会ったのは、母国ニュージーランドから日本に留学した高校一年の時。「スター・ウォーズみたいで、軽い気持ちだったが、最初の半年は練習の苦しみを味わった。足の裏はマメだら

「生死」体験 忘我の境地

著者来店

返って、の繰り返し、一つの境地を生み出した。「怖ろしくもなく、ハイになったという訳でもない」境地。限界をはるかに超えたところに、我を忘れる達成感があった。再来日して、本格的に日本の大学で「武士道」を研究し

始めた時、自らの忘我の体験が、ある種の宗教的体験と言えることに気づく。文化人類学的に考察すると、戦時の武士にとってリアルだった生死の問題を、平時に体験する儀式としての宗教的役割だ。ただその一方で、明治期以降、国民全体の信仰ともいえるイデオロギーと化したことも指摘する。

「現代の日本人は武士を美化しすぎる。生死について考えるを得なかった緊張感、葛藤が考慮されていない。武士道とは、日本固有のこの精神を解き明かす『剣道』に教わりはしない。」(恩田隆出 版、4800円) 驚見一郎

読売新聞社の許諾を得て転載しています

幸田露伴の世界

井波律子・井上章一著

さまざまな分野の研究者が集まり、小説や評論など文学面はもちろんのこと、都市・遊技・旅行・自然観察・人生論等々の著作を通じて多様な角度から露伴にアプローチした、国際日本文化研究センターの共同研究の成果。

▶A5判・328頁／定価5,250円 ISBN978-4-7842-1444-0

光芒の大正

川内まごころ文学館蔵 山本實彦関係書簡集
改造社関係資料研究会編

『改造』の創刊者山本實彦宛の、大正8年(1919)から昭和5年(1930)までの書簡を詳細な解説とともに活字化。収録書簡132通、差出人82名。

▶A5判・290頁／定価5,250円 ISBN978-4-87842-1459-4

漱石と世界文学

坂元昌樹・田中雄次・西楨 偉・福澤清編

漱石が世界文学を意識し、そこから多大な影響を蒙ったことの検証だけでなく、その後の日本文学を含め世界文学に与えたインパクトや、世界で漱石文学が翻訳の形でいかに受容されたのかなどをも見極める9篇。

▶四六判・262頁／定価2,940円 ISBN978-4-7842-1460-0

ディドロとルソー 言語と《時》

小宮彰著

十八世紀思想の可能性

日本ではあまり認知されていないディドロの「他者」の視点を中心とした思想を、近代社会思想の起源としてのルソーに対置することによって、「近代」の《時》の起源と「言語」を問いなおす。

▶四六判・316頁／定価2,940円 ISBN978-4-7842-1448-8

曾田三郎著

立憲国家中国への始動

明治憲政と近代中国

最新刊

従来の単線・単純な辛亥革命史研究の枠組みを打開すべく、立憲国家中国の形成という観点から叙述する中国近代史。内閣制を中心とする行政制度改革や、省制・省政の改革を軸に、大隈重信などの政治指導者や、有賀長雄のような伊藤系の法学者などの影響を具体的に把握することで、明治憲政の影響を動態としてとらえる。

【内容目次】

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 序章 近代中国における憲政導入の模索 | 7章 諮議局の創設と国会開設期限短縮後の官制改革 |
| 1章 日露講和問題と海外政治視察団の派遣 | 8章 中華民国憲法案の起草と外国人顧問 |
| 2章 海外政治・憲政視察団の派遣と日本 | 9章 中華民国初年における |
| 3章 編纂官制館・憲政編查館と官制改革案の作成 | 地方制度改革案の審議と挫折 |
| 4章 官制改革の推移と日本・日本人 | 10章 中華民国成立後の憲法案と地方制度改革論 |
| 5章 地方官制改革と省行政組織の改編 | 終章 明治憲政と近代中国——同時代日本人の観察 |
| 6章 地方行政組織の改編と諮議局創設への着手 | 索引 (人名・事項) |

そだ・さぶろう……1948年生。広島大学大学院文学研究科東洋史学専攻博士課程単位取得退学。現在、広島大学大学院文学研究科教授。主著『中国近代製糸業史の研究』（汲古書院、1994年）。編著『近代中国と日本』（お茶の水書房、2001年）ほか。

▶A5判・410頁／定価8,400円

ISBN978-4-7842-1464-8

日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚

松田利彦・やまだあつし編

敗戦により植民地から切り離された日本では、かつて官僚支配の構造が海を越えて植民地にまでおよんでいたことは、あまり注目されてこなかった。本書は、近代日本の朝鮮・台湾支配を現地で担った「植民地官僚」に着目して、日本の朝鮮・台湾支配を考察する20篇を収録。

▶A5判・756頁／定価13,650円



ISBN978-4-7842-1451-8

青島の都市形成史:1897-1945

市場経済の形成と展開

樂玉璽著

青島がドイツ・日本とその間に持った経済関係や、その関係が築かれた歴史的要因、青島の経済発展の過程や特徴、さらに青島が全中国へ与えた影響を解明。日中両国の広範な資料を用いることにより、詳細かつ中立的・客観的な立場での考察を試みる。

▶A5判・364頁／定価7,140円



ISBN978-4-7842-1453-2

条約改正交渉史 1887-1894

大石一男著

大隈重信外相による条約改正交渉から、陸奥宗光外相による日英通商航海条約締結までの時期について、日本側の交渉戦略・交渉戦術、交渉相手の欧米列国の動向、日本国内における諸個人・諸集団の協力・対抗・競合の側面という3つの視角から分析する。

▶A5判・356頁／定価6,825円 ISBN978-4-7842-1419-8

貴族院と立憲政治

内藤一成著

明治から大正前期にかけての貴族院を主導し「官僚系」「山県系」などといわれた院内会派、幸倶楽部、および子爵議員を中心とした最大会派、研究会の動向を中心に分析。政党研究にくらべ著しく立ち遅れている貴族院に研究のひかりをあてた一書。

▶A5判・438頁／定価7,980円

ISBN4-7842-1278-7

朝鮮近現代史を歩く

京都からソウルへ

太田修著

〔佛教大学鷹陵文化叢書②〕

朝鮮半島とそれにつながる人々にとって植民地支配と戦争の歴史はどのようなものであり、どのように記憶されているのか…。歴史と縁のある場所を訪れ、風景に触れ、人に出会ったなかから生まれた一書。

▶46判・270頁／定価1,995円 ISBN978-4-7842-1450-1

「封建」・「郡建」再考

東アジア社会体制論の深層

張翔・園田英弘編

中国と日本の知識人による「封建・郡建」をめぐる対話を再検討。中央と地方の関係だけでなく、秩序と規範、教育と学問、自国と外来勢力、科挙と身分制、家族とコミュニティの構造、官僚制などを多角的にとりあげた13篇。

▶A5判・412頁／定価6,825円

ISBN4-7842-1310-4

史料探訪

37

ブリキのおもちゃ——「小菅のジープ」——

松浦俊和

大津市歴史博物館館長

大津市歴史博物館では、大津の歴史を特徴付ける「近江八景」「東海道」などに関わる資料を精力的に収集しているが、ここではあまり知られていない少しマニアックなものを紹介したい。それは表題に挙げたブリキのおもちゃで、なぜ、これを館で収集したのかというと、戦後第1号のブリキのおもちゃが作られたのがほかならぬ大津であり、その製品が「小菅^{こすげ}のジープ」と呼ばれた、当時の占領軍のジープを参考にして作られたおもちゃであったことによる。

「小菅のジープ」の製作者は小菅^{まつぞう}松蔵（1899～1971）という人物で、戦前から東京で小菅玩具製作所という会社を設立し、ブリキのおもちゃを製造していた。だが、昭和10年代に入り戦時色が強まってくると、ブリキのおもちゃの製造も難しくなり、同業者の多くは軍需産業に転向し、小菅の会社も日立製作所・住友金属の協力工場として軍需物資の製造に携わるようになっていく。そして、昭和20年、住友系列の軍需工場が大津に疎開することになったため、小菅の工場も大津に移転し、当地で終戦を迎えることになる。

だが、終戦直後の混乱期のなかでも、小菅はおもちゃ作りのことを決して忘れることはなかった。当時、市内を走っていた占領軍のジープに目を付け、ブリキのおもちゃにすることを思い付く。その材料には、どのような経路で入手したのかはわからないが、大津駐留の占領軍から大量に出る空き缶を利用したという。

当時のおもちゃの型は、実際の車のカタログなどを参考に製作していくのが基本だったが、もちろん占領軍のジープのカタログなどあるはずがない。かといって昼間堂々と駐車しているジープを採寸するわけにもいかない。考えた末、彼は、毎夜、銭湯の帰りに手拭いをジープにあて、寸法を測って金型を造ったという逸話も残されている。

おもちゃの製造工場は一ヶ所ではなく、大津市内の石山寺近辺から膳所^{ぜぜ}界限にかけて数ヶ所あり、工程ごとに分けられていたようである。主な工場は石山寺三丁目と相模町の二ヶ所で、いずれも戦前に牛小屋だった建物を再利用した粗末なものだったらしい。だが、ジープ製造の最盛期には、近隣の人たちが大勢働いていたという。

このようにして製造されたおもちゃのジープは、いよいよ昭和20年12月、京都の丸物百貨店で売り出される。1個10円。全長10cm、全幅4.5cm、全高5cm前後の小さなもので、動力はゼンマイではなくゴム、吹き付け塗装（当初の色は濃いグリーン）、発売当初は箱もない（まもなくボール紙を折り曲げた簡単な

箱に入れて販売、表面に「Jeep!」と「ジープ」のゴム印を押した箱が見つかったという、戦前のおもちゃの水準から比べても粗末な製品であった。だが、これが大人気を呼び、飛ぶように売れ、年末の大晦日も徹夜で製造するほどだったという。その年の暮れだけで10万個を売ったという話も伝わっている。

ブリキのジープの発売から四ヶ月余り経った、昭和21年4月26日付の『滋賀新聞』掲載の社告を見ると、社名を「株式会社研精社製作所」から「小菅玩具工業株式会社」に変更し、同時に本社を東京に移している。そして、大津には大津支社と石山工場・塗装工場・板金工場があり、京都にも京都事務所を置くなど、会社が順調に成長していることがうかがえる。その後も、工場設備の賃貸や譲渡の募集、従業員の募集を新聞紙面で行うなど、業績は順調だったようである。

このように事業が順調にいったいなかであっても、小菅は元々の工場があった東京が復興するにつれて、生産拠点を東京に移そうと考えていたようで、昭和22年頃には大津を離れ、東京に



小菅のジープ 昭和20年(1945)頃／44×103×48

帰っている。帰京に際して、小菅は大阪の工場設備を、大津疎開時に援助を受けた人物に譲渡し、昭和23年1月、「株式会社太湖工業」という新会社がスタートする。ここでブリキのおもちゃの製造が続けられ、キャデラックやクライスラーなどの乗用車のおもちゃが作られていた。だが、それも長くは続かず、昭和24年頃に太湖工業が大阪へ移転すると、しばらく(昭和25・26年頃まで)は大津でも操業していたようだが、その後は大津でのおもちゃの製造は行われなくなってしまう。

このように戦後数年の出来事ではあったが、戦後第1号のブリキのおもちゃが大津で製作され、当時の子供たちに絶大な人気を博するとともに、食糧輸入の見返り物資としてアメリカにも輸出していたといったように、「小菅のジープ」が戦後日本の復興に一役かっていた歴史を忘れることなく、これからも語り継いでいきたいものである。

—MEMO—

夏の企画展「戦争と市民——湖国から平和へのメッセージ——」

会 期：7月25日(土)～8月30日(日) 月曜日休館

市内各所に置かれた軍の施設に関する資料、戦時中の市民生活を紹介する資料、そして県下各地の多くの方々から寄せられた戦争を語り継ぐ資料などの展示を通して、平和の大切さを発信していく。

大津市歴史博物館 〒520-0037 大津市御陵町2-2 TEL077-521-2100
京阪電車石坂線「別所」駅下車、徒歩5分

※鴨東通信No.73(前号)のMEMO欄、国立能楽堂様の電話番号に誤りがございました。

下記の通り訂正しお詫び申し上げます。

誤：03-3424-1331 正：03-3423-1331

松前景広『新羅之記録』の史料的研究

新藤透著

最新刊

中世から近世初期の北方史研究における最重要史料『新羅之記録』について、はじめて本格的に書誌学的に考察を試み、その史料価値を明らかにする。書名の読み方・その著者、現在知りうる全写本の収集・分類、著者が著作にあたって使用した史料、記述内容の信憑性、後世に編纂された史料に与えた影響の5課題を設定し、綿密に考証する。

【内容目次】

序論 『新羅之記録』について

第一編

『新羅之記録』の書名、著者／『新羅之記録』の各写本／『新羅之記録』の写本の分類

第二編

『新羅之記録』と新羅明神史料／安藤氏遠祖伝承に関する『新羅之記録』記事の検討／『寛永諸家系図伝』所収「松前系図」の成立過程／『寛永諸家系図伝』所収「松前系図」の検討／『松前系図 全』と『新羅之記録』

第三編

コシヤマインの戦いに関する『新羅之記録』の史料的研究／『新羅之記録』の中世アイヌ蜂起関係記事の検討／『新羅之記録』にみられる近世初期の蠣崎・松前氏の中央政権との接触記事の基礎的検討

第四編

『松前年々記』における『新羅之記録』記述の影響／『福山秘府』年歴部の基礎的検討／『松前家記』の基礎的検討

補論 近代における『新羅之記録』受容の一考察

▶A5判・512頁／定価12,600円

ISBN978-4-7842-1466-2

元三大師御籤本の研究

おみくじを読み解く

大野出著

おみくじに関する初めての研究書。おみくじの源流を探っていくと、必ずたどり着くのが元三大師御籤。実は現代のおみくじも多くは元三大師御籤本に由来している。江戸時代のそれらの史料群を時系列に従って比較、分析することによって、天道信仰をはじめ、さまざまな信仰の姿を明かす。



▶A5判・212頁／定価3,570円 ISBN978-4-7842-1454-9

日光東照宮の成立

近世日光山の「莊嚴」と祭祀・組織

山澤学著

徳川将軍家および幕府の崇敬の地となった近世日光山の成立過程を、東照宮を支えた将軍ないし天皇を頂点とした力学、神格を再生産すべく構築された祭祀組織と祭礼の特質、権現造建築に示される建築・空間を規定した同時代社会、さらにその裾野に広がる町の形成、これら全体を構造的に把握することにより明らかにする。



▶A5判・418頁／定価5,985円 ISBN978-4-7842-1452-5

口頭伝承と文字文化

文字の民俗学 声の歴史学

笹原亮二編

「口頭伝達を重視する民俗学、文献を重視する歴史学」という観念は崩れつつあるが、新たな方法論はまだ打ち出されていない。フィールドワークによる生の資料と、文字で伝えられた資料、両者の扱い方に着目し、新たな研究方法を論じる。

▶A5判・444頁／定価7,350円 ISBN978-4-7842-1447-1

増補・改訂南北朝期

公武関係史の研究

森茂暁著

当該期の公家政局の構造および朝廷と幕府との関係を、豊富な史料をあけて実証的に読み解き、その後の中世政治史の発展を決定づけた名著を増補・改訂して復刊。32頁におよぶ新補注を付し、旧版刊行後に見いだされた基礎データ等を収録。

▶A5判・606頁／定価9,450円 ISBN978-4-7842-1416-7

隔莫記 全7巻 (本篇6冊・総索引1冊)

本篇：赤松俊秀校訂／総索引：『隔莫記』研究会編
近世文化揺籃期の社会相を知る最重要史料として多くの研究分野で利用されてきた、金閣鹿苑寺住持鳳林承章自筆の日記『隔莫記』。総索引の完成を機に、全7巻セットとして復刊。

▶A5判・平均700頁

[本篇・総索引セット] 定価73,500円 ISBN4-7842-1311-2

[総索引のみ] 定価14,700円 ISBN4-7842-1312-0

東寺宝物の成立過程の研究

新見康子著

南北朝時代の寺誌である『東宝記』や東寺百合文書にみられる宝物目録など豊富な史料をもとに、東寺に残る文化財の伝来過程を具体的に体系化した一書。今後の文化財の活用や保存を前提に、本来の保管形態を復元し、伝来を確定して位置付けをしなす。カラー口絵4頁・本文挿入図版80点

▶A5判・634頁／定価12,600円 ISBN978-4-7842-1368-9

熊本藩の地域社会と行政

近代社会形成の起点

吉村豊雄・三澤純・稲葉継陽編

近世地域社会論の成果と課題を踏まえて、西国大藩としての熊本藩領内の地域社会像を描き出す意欲的論集。

【執筆】稲葉継陽・松崎範子・内山幹生・吉村豊雄・木山貴満・三澤純・上野平真希・今村直樹

▶A5判・420頁／定価9,450円 ISBN978-4-7842-1458-7

畿内の豪農経営と地域社会

渡辺尚志編

18世紀末以降、河内国岡村の庄屋を世襲した豪農・地方名望家岡田家。近世・近代において同家が作成・授受した「岡田家文書」は1万数千点にもおよぶ。近年整理が進められている岡田家文書を多角的に分析し、畿内における村落と豪農の特質を経済・社会構造の観点から解明。

▶A5判・508頁／定価8,190円 ISBN978-4-7842-1385-6

近世社会と百姓成立 構造論的研究

渡邊忠司著

佛教大学研究叢書1

近世社会における「百姓成立」について、領主権力による「成立」の構造を再検証し、百姓の観点から百姓自らが創出した「成立」の条件と構造を年貢負担と村内の組織編成、質入の検討により解明。

▶A5判・310頁／定価6,825円 ISBN978-4-7842-1340-5

中世・近世の村と地域社会

西村幸信著

大和を中心とした中世・近世の村落構造に関する諸論考。第一部には村落中間層のあり方に注目し、学界で支配的な「自力の村」論に真っ向から異論を唱えた主要論文を収め、第二部では松波勘十郎と郡山藩領についての新発見など『広陵町史』近世篇に結実した業績を収める。

▶A5判・404頁／定価6,510円 ISBN978-4-7842-1353-5

徳川将軍家領知宛行制の研究

藤井讓治著

思文閣史学叢書

近世社会、特に領主社会での徳川将軍家と大名との関係を成立させる領知制。本書はその領知制を基礎のところで成立させている領知朱印状そのものに注目し、徳川将軍家の領知宛行制の形成過程とその特質を明らかにする。各章末に領知朱印状の一覧を付す。

▶A5判・412頁／定価7,875円 ISBN978-4-7842-1431-0

瀬戸内海地域社会と織田権力

橋詰 茂著

思文閣史学叢書

特産物の塩、周辺物資の海上輸送、在地権力の動向、海賊衆や真宗勢力の台頭、制海権をめぐる抗争など、瀬戸内海・四国をとりまく実態を明かす。

【内容目次】瀬戸内海社会の形成と展開／瀬戸内海社会の発展と地域権力

▶A5判・396頁／定価7,560円 ISBN978-4-7842-1333-7

近世吉野林業史

谷 彌兵衛著

吉野の地に生まれ、林業とそれに携わる人々の浮沈を間近に見て育った著者が、吉野林業の光と影を、史料に基づいて実証的に明らかにした本書は、吉野林業を初めて通史的にとりあげた研究として、画期的意義を有する。

▶A5判・538頁／定価9,765円 ISBN978-4-7842-1384-9

近世後期瀬戸内塩業史の研究

山下 恭著

塩業と醬油業における開発・経営・塩専売制・流通問題を細かく分析し、さらに塩業における燃料問題と労働条件を数量的に解明した基礎的研究の一書。

▶A5判・300頁／定価6,300円 ISBN4-7842-1287-6

室町期東国社会と寺社造営

小森正明著

思文閣史学叢書

寺社の造営事業は、寺社を中心とする経済活動—寺社領経済—の発展に大きな効果をもたらした。本書は、鎌倉府体制下にあった室町期の東国社会に、寺社造営事業と寺社領経済が与えた影響を考察する。「香取文書」など中世東国の「宛券」の長年にわたる分析に基づく成果。

▶A5判・356頁／定価7,350円 ISBN978-4-7842-1421-1

戦国期関東公方の研究

阿部能久著

思文閣史学叢書

関東公方権力の戦国期から江戸期初頭にかけての諸問題を解明。公方発給文書の様式変化にみる権力構造の実態、鶴岡八幡宮・鎌阿寺や禅宗・一向宗などの寺社勢力との関係、関東公方家の後裔・喜連川家の幕藩体制下の位置、さらに武家故実書『鎌倉年中行事』の成立背景を探る。

▶A5判・320頁／定価5,985円 ISBN4-7842-1285-X

室町・戦国期研究を読みなおす

中世後期研究会編

【2刷】

踏まえる、拓く——新進気鋭の若手研究者たちが提示する研究の過去・現在・未来。

【執筆】松永和浩・桃崎有一郎・山田徹・吉田賢司・平出真宣・尾下成敏・西島太郎・清水克行・三枝暁子・早島大祐・高谷知佳・大田社一郎・安藤弥

▶A5判・408頁／定価4,830円 ISBN978-4-7842-1371-9

安房妙本寺日我一代記

佐藤博信著

【2刷】

安房妙本寺の歴代住職のなかで、戦国時代の一宗教者として際だった足跡を残した日我（永正5年～天正14年）の一代記を古文書や記録などの諸史料を用いて年代記（クロノロジー）風に記述し、日我の実像に迫る。口絵4頁。

▶46判・208頁／定価3,150円 ISBN978-4-7842-1373-3

キリシタン大名の考古学

【7月刊】

別府大学文化財研究所・九州考古学会・大分考古学会共編

九州では、大分の豊後府内の遺跡や大村氏の城館城下の遺跡、島原の原城跡などの調査が進み、いわゆるキリシタン大名やキリシタンにかかわる遺跡の発掘の成果が出て、研究は新しい段階に入り始めている。考古学的成果を単に取りまとめるのではなく、考古学の領域を越えて、文献史学や分析科学などの他領域の成果も融合し、新しい戦国城下論・キリシタン考古学論・流通論など、新たな研究方法を模索する意欲的な一書。

I キリシタンの活動とキリシタン大名の町

キリシタン遺跡から見たキリシタン宣教（五野井隆史）
【コラム】高槻城キリシタン墓地（高橋公一） 巡察師ヴァリニャーノの見た豊後「府内」（坂本嘉弘）
【コラム】豊後府内のキリスト教会墓地（田中裕介） 肥前大村の成立過程（大野安生） 豊後府内の成立過程（上野淳也）
【コラム】肥後八代・麦島城と小西行長（鳥津亮二）

II キリシタン遺物は語る

豊後府内出土のキリシタン遺物（後藤晃一）
【コラム】博多出土のキリシタン遺物（佐藤一郎） 原城出土のキリシタン遺物（松本慎二）
【コラム】天草のキリシタン遺物（平田豊弘） キリシタン考古学の可能性（今野春樹）
【コラム】キリシタン生活を支えたメダル（デ・ルカ・レンゾ） 南蛮交易と金属材料（魯視琰・西田京平・平尾良光）
【コラム】石見銀山と灰吹法（仲野義文） 大航海時代における東アジア世界と日本の鉛流通の意義（平尾良光・飯沼賢司）

▶B5判・180頁／定価3,990円 ISBN978-4-7842-1472-3

経筒が語る 中世の世界

【2008年刊】

小田富士雄・平尾良光・飯沼賢司編

藤原道長の造営で知られる経塚・経筒。本書は、全国に先駆けて経筒の埋納が行われ、出土数でも他を圧倒する九州出土の経筒をおもにとりあげ、考古学・歴史学・美術史学に加え、分析科学など先端機器を駆使した先駆的研究も収録。分野・地域を越えた学際的な視点から「経筒が語る中世の世界」をえがく。2007年に別府大学文化財研究所が主催した文化財セミナーの成果。

I 経筒が語るヒトの交流の世界

銭は銅材料となるのか（飯沼賢司）／材料が語る中世（平尾良光）／九州出土経筒の鉛同位体比が語るもの（石川ゆかり・平尾良光）／経筒の制作と地域性（原田一敏）／埋経と仏像（八尋和泉）／経塚勧進僧の行動と連鎖の軌跡（栗田勝弘）

II 九州地域出土の経筒が語る世界

九州における経塚・経筒研究（小田富士雄）／肥後における経筒について（島津義昭）／熊本県人吉・球磨地方における経筒について（和田好史・山本研央）／肥前佐賀の経塚（田平徳栄）／大宰府における経塚経営とその背景（山村信榮）／筑後の経塚と経筒（小澤太郎）／福岡県みやこ町出土の経筒鋳型（木村達美）／福岡県みやこ町勝山松田出土の経筒（井上信隆）／大分県宇佐市妙楽寺出土経筒（佐藤良二郎）

▶B5判・236頁／定価5,040円 ISBN978-4-7842-1409-9



戦国大名の外交と都市・流通

豊後大友氏と東アジア世界

鹿毛敏夫著

【思文閣史学叢書】

政治・経済・文化的にアジア諸国と緊密な関係にあった西国大名による都市・流通政策の実態を明らかにする。

▶A5判・300頁／定価5,775円 ISBN4-7842-1286-8

鉄砲 伝来とその影響

洞富雄著

日本の中国侵略戦争時、軍部への反発から書いたという論文から生まれた『鉄砲伝来記』（1939）以来半世紀、日本史家としての関心から鉄砲に取り組んできた著者の総決算ともいえる力作。

▶A5判変・530頁／定価10,290円 ISBN4-7842-0657-4

宣教と受容

明治期キリスト教の基礎的研究

中村博武著

日本におけるキリスト教の宣教と受容を新資料の検証を通して解明した力作。

▶A5判・610頁／定価12,600円 ISBN4-7842-1025-3

埴仏の来た道 白鳳期仏教受容の様相

後藤宗俊著

粘土で作られた小さな仏、埴仏。インド～長安～飛鳥～宇佐という伝来の道を丹念にたどり、そこにこめられた祈りの諸相を明らかにする。考古学・美術史・文献史学などにわたる学際的研究。

▶A5判・322頁／定価5,985円 ISBN978-4-7842-1433-4

日本古代都市史研究

古代王権の展開と変容

堀内明博著

長岡京・平安京などの王朝都市から中世前期都市まで、都城の展開と変容を時系列的に分析し、古代王権のあり方を考古学の成果を踏まえて解明。

▶B5判・514頁／定価15,750円 ISBN978-4-7842-1457-0

大地へのまなざし

歴史地理学の散歩道

金田章裕著

古代日本の条里制から世界地図まで、グローバルな研究を展開してきた著者の諸論稿をまとめる。

▶A5判・322頁／定価4,725円 ISBN978-4-7842-1405-1

九州の蘭学—越境と交流—

ヴォルフガング・ミヒェル／鳥井裕美子／川眞人編

【最新刊】

近世、西洋への唯一の窓口であった長崎及び九州各地で、人々が在来の学術とは異質な西洋近代科学にどう向き合い、学び取って、世のため人のために役立てたのか。あるいは来日した西洋人が、知的交流や技術移転にどれほど貢献したのかを、最新の研究成果に基づき、彼らの業績と足跡を通して明らかにする。

◆◆内容目次◆◆

第1章 江戸前期

沢野忠庵／向井元升／西元甫／カスパル・シャムベルゲル／河口良庵／原三信・本木良意／嵐山甫庵／橋本鎮山／ケンベル／今村英生

第2章 江戸中期

前野良沢／吉雄耕牛／本木良永／ツェンペリー／島津重豪／松浦静山／志筑忠雄／本木正栄／ドゥーフ／帆足万里／ティツィング／辛島正庵

第3章 江戸後期

村上玄水／奥平昌高／大江春塘／神谷源内／川原慶賀／鶴峯戊申／百武万里／武谷元立・武谷祐之／黒田斉清／黒田長湊／シーボルト／日野鼎哉／賀来佐之・飛霞／高島秋帆／池部啓太／田中久重／鍋島茂義／伊東玄朴／橋本宗建とオットー・モーニッケ

第4章 幕末

大庭雪斎／ファビウス／島津斉彬／鍋島直正／佐野常民／大江雲澤／ボンベ・ファン・メルデルフォールト／ボードイン／松本弘安（寺島宗則）／マンスフェルト／長与専斎／上野彦馬／田代基徳／藤野玄洋／福沢諭吉

▶46判・384頁／定価2,625円



ISBN978-4-7842-1410-5

海国日本の夜明け

オランダ海軍ファビウス駐留日誌
フォス美弥子編訳

オランダ海軍中佐G・ファビウスの連続3度のべ8カ月間にわたる本邦初紹介の駐留日誌ほか公文書を取録。長崎を舞台とした幕府や西南各藩との交流、英米艦隊との駆け引きなど幕末の日蘭史を明かす貴重な史料集。

▶A5判・400頁／定価5,250円 ISBN978-4-7842-1047-4

近代西洋文明との出会い

黎明期の西南雄藩

杉本 勲編

佐賀藩を中心とした幕末期の西南雄藩と近代西洋文明との出会い、またその受容の歴史を、関連する諸側面から掘下げ、近代化の諸相を明らかにする。

▶A5判・300頁／定価4,830円 ISBN4-7842-0566-7

東アジアの本草と博物学の世界

山田慶児編

【上・下】

東の本草と西の博物学は日本で遭遇する。物にそそがれる新しい眼の誕生、物のかぎりない多様性の発見。本草と博物学における知的冒険の展開に興味はつきない。

▶A5判・平均370頁／(各)定価7,875円
(上)ISBN4-7842-0883-6 (下)ISBN4-7842-0885-2

医療福祉の祖 長与専斎

外山幹夫著

日本近代の医療・衛生・福祉の確立者ともいべき専斎の生涯に焦点をあて、明治新政府の政策のなかで近代医療福祉制度がどのように整備されたか、その功績を家族・交友関係など幅広い視点から明かす。

▶46判・200頁／定価2,100円 ISBN4-7842-1107-1

幕末軍事技術の軌跡

佐賀藩史料『松乃落葉』

杉本 勲・酒井泰治・向井 晃編

佐賀藩藩主鍋島直正の側近として活躍した本島藤太夫松蔭の編著を、杉本博士を中心とする「西南諸藩洋学史研究会」が翻刻・解説・異本との校訂など十年の歳月をかけて完成。

▶A5判・450頁／定価8,925円 ISBN4-7842-0467-9

幕末期長州藩洋学史の研究

小川亜弥子著

長州藩における洋学の受容と展開の実態に、軍事科学化という側面から迫り、また洋学史の側面からのアプローチにより、長州藩明治維新史研究の空白を埋めることをも目指した意欲作。

▶A5判・284頁／定価7,140円 ISBN4-7842-0967-0

本草学と洋学

小野蘭山学統の研究

遠藤正治著 〈第16回矢数医史学賞〉〈第2回徳川賞〉

日本本草学の頂点、小野蘭山の学統を考察の対象にし、洋学の影響を受け国際的視野を備えた博物学的な本草研究の実態を探り、わが国最初の近代的植物図譜『草木図説』誕生の環境を明らかにする。

▶A5判・400頁／定価7,560円 ISBN4-7842-1150-0

広瀬旭莊全集 【全12巻・別巻1】

編集 中村幸彦・多治比都夫・岡村 繁・
中野三敏・井上敏幸

江戸末期折衷派の儒者・広瀬旭莊の幕末（天保4～文久3年）31年間の日記を中心に、詩文・随筆・書簡を網羅。

▶B5判・平均560頁／既刊揃149,100円

古写本とは、おおむね江戸以前、すなわち平安・中世に書写された本のことをいうが、それに対して、古筆とは、古写本を筆跡を主眼に置いてみた場合の呼称である。

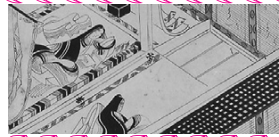
わが国においては、平安・鎌倉両時代に、料紙・筆跡ともに麗しく優れた本が数多く制作されてきたが、室町の後半ごろから、茶道の隆盛などと相俟って、古人の筆跡熱が高じるあまり、それまで伝わってきた一巻の書物、一冊の典籍を、一枚・一枚の紙片に解体し、これがある時には掛軸に仕立て、またある時には屏風に貼りなどして、鑑賞するようになった。こうして生まれたのが古筆切である。

こうした古人の筆跡への深い熱を支えていたのは、いったい何であつたろうか。それは、おそらく公家はもちろんのこと、武家にあつても、王朝文化に対する限り無い憧憬の念であつたろうと考える。近年、続々と紹介されて話題を呼んだ、冷泉家の典籍の中から、以下、実例を引いてみよう。

六歌仙で知られる遍昭へんしょうの歌集『花山僧正集』は、十二世紀初頭の書写で、飛雲や雲母きらくら引き料紙を用いた小振りの、いかにも王朝貴族好みの仕立てとなつているが、巻末二丁は、それ以前とは似ても似つかない素紙に定家様で書写されており、はて、これはいったい何事かと奥書を解説してみれば、秀吉五大老の一人宇喜多秀家の求めによって、冷泉為満が末二丁を切り取つてこれを献上、代わりに定家様で補写しおいたものであることが判明する。

源氏物語千年紀・古典再生に向けて〈第八回〉

王朝文化を今に伝える古筆切



田中 登
(関西大学教授)

時に文禄三年（一五九四）七月のことであつた。

藤原実頼の歌集『小野宮殿集』は、いとも愛らしい升型本で、これぞまさしく全丁定家の揮毫になるかと思えば、さにあらず。

これまた奥書によれば、永正八年（一五一二）八月に、冷泉為和が、今川氏親の所望によって定家自筆の本を献上した折、一字違わず原本を模写しおいたのが、今の冷泉家本なのだという。

さて、宇喜多秀家といい、今川氏親といい、戦国乱世を生き抜いた武将たちは、いったい何用があつて、こうした古筆を求めたのか、その理由について思いを致してみるに、これはやはり過ぎ去った輝かしき王朝文化に対する、深い憧憬の念というより他なからう。

徳川家康によつて天下が統一され、平和な時代が訪れると、当然のことながら経済も繁栄し、今度は、公家や武家のみならず、町人たちまでも、古筆を集めてはこれを手鑑てかみじょう帖に仕立てて鑑賞するようになった、かように、わが国においては、鎌倉・室町・江戸と、時代は変われど、王朝文化に対する畏敬の念だけは、いつの世にも変わることなく、連綿と続いてきたのである。

このように考えきざると、昨今の源氏物語ブームなども、必ずしも一過性の流行現象などではなく、その根底には、やはり、王朝的なものに対する、わが国民の限り無き信頼の念が横たわっているように思われるのだが、はたしていかがであらうか。

禁裏・公家文庫研究

田島 公編

勅封のため全容が不明であった東山御文庫本を中心に、近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の諸文庫収蔵本に関する論考・史料紹介・データベースを収載するシリーズ。B5判。

〔第一輯〕▶390頁／定価10,290円 ISBN4-7842-1143-8

〔第二輯〕▶400頁／定価10,290円 ISBN4-7842-1293-0

〔第三輯〕▶490頁／定価12,390円

ISBN978-4-7842-1414-3

源氏物語 千年のかがやき

国文学研究資料館編

新出の国文学研究資料館蔵『源氏物語団扇画帖』全54枚などをカラーで掲載し、詳細な解説を付す。

▶A4判・168頁／定価1,995円 ISBN978-4-7842-1437-2

平成新修古筆資料集 第一～四集

田中 登編著

編者所蔵の古筆切から各約100点を平易な解説と図版で分かりやすく紹介。

▶A5判・平均240頁／定価①2,730円②③④2,625円

三藐院 近衛信尹 残された手紙から

前田多美子著

「寛永の三筆」として日本書道史に名を謳われてきた近衛信尹（のぶただ）の生涯を、残された手紙から読み解く。

▶A5判・270頁／定価2,415円

ISBN4-7842-1299-X

橘為仲朝臣集

片桐洋一解説

藤原定家手沢の伝西行筆歌集を完全複製。和装桐箱入。片桐洋一氏による解説・釈文（別冊）を付す。

▶釈文・解説98頁／定価57,750円 ISBN4-7842-1160-8

中世史科学叢論

藤本孝一著

永年史科学の現場で調査・研究に携わってきた著者が、40年の研究成果をまとめた初の論集。

▶A5判・444頁／定価9,450円

ISBN978-4-7842-1455-6



中世蹴鞠史の研究 鞠会を中心に

稲垣弘明著

これまであまり顧みられることがなかった、室町期以降の蹴鞠会の挙行形態の歴史を体系的に論じる。

▶A5判・300頁／定価5,775円 ISBN978-4-7842-1390-0

古筆切研究 第一集

小林 強・高城弘一共著

著者及び村上列氏蒐集の古筆切の中から50点を紹介。解題・翻刻のほか関連資料等にも言及。

▶A5判・280頁／2,940円

ISBN4-7842-1040-7

近衛家熙写手鑑の研究 仮名古筆篇

村上翠亭・高城竹苞共著

陽明文庫蔵・近衛家熙写手鑑所収の仮名古筆を原寸大で収録。詳細な考証を加え、原本などの参考図版も併載。

▶A4判・280頁／定価12,600円

ISBN4-7842-0968-9

くずし字辞典

波多野幸彦監修／東京手紙の会編集

自筆消息（書状）から筆跡（35,000字・著者総数400人）を拾集。解説はもとより、筆順や筆法も鑑賞できる辞典。

▶A5判・1400頁／定価6,300円

ISBN4-7842-1024-5

宮内庁書陵部編

花園院宸記 全35巻

日記の最高位 全35巻を完全複製



※延慶三年花園天皇十四歳の時より、元弘二年、三十六歳の時に至る二十三年間の天皇自筆日記の原本

※傑出した能筆家であり、その巧まざる達筆をもって、自在に書記された宸記は他に類を見ない書道史上の優品

※宮内庁書陵部の研究者による釈文及び書誌的事項を中心とした解説を別冊として各巻に付した

※三色ないし四色のコロタイプ印刷で、原本に近い色調を再現、裏書についても裏打ちを考慮して再現に努めた

▶既刊18回・27巻・揃定価6,568,260円
以後平成26年まで毎年1回配本
平均予価390,000円

※分割払い等既刊分の条件はご相談ください

戸田勝久先生喜寿記念論集刊行会 編

武野紹鷗 わびの創造

裏千家今日庵業跡であり、教授者（茶名宗安）と併せて、永年茶の湯研究に従事してきた戸田勝久先生の喜寿を記念し、武野紹鷗を基軸として、斯界の論者24人が原稿を持ち寄った論集。

【内容目次】

第一部 紹鷗像とその茶の伝統

武野紹鷗と千利休（熊倉功夫）室町末期の三条西家の三栖庄経営と武野紹鷗（中村修也）武野紹鷗と本願寺（山田哲也）武野紹鷗の書状（宇野千代子）珠光「心の一紙」再考（筒井紘一）天正期・堺商人の剃髪（谷端昭夫）江戸時代前期の千家の茶の湯における武野紹鷗（原田茂弘）齋田記念館所蔵武野紹鷗関係史料（鍵谷眞由実）中世美学媒介者像の蹉跎（田中秀隆）

第二部 禅と文芸

紹鷗・宗瓦・宗朝の禅（泉田宗健）鷗の詩想（石川忠久）茶の湯と歌論に関わる一考察（福良弘一郎）『紹鷗百首』のもたらす意味（石塚修）俳諧師たちの茶の湯（矢野夏子）戸田勝久の紹鷗研究（小倉光夫）

第三部 好みとわびの表現

袋棚の研究（伊東明弘）膚釜の創造（長野埤志）紹鷗と竹の茶道具（池田瓢阿）染織文化からみた武野紹鷗（佐藤留実）紹鷗緞子について（吉岡明美）「小倉色紙」と茶（名児耶明）紹鷗時代の茶碗（竹内順一）紹鷗所持名物道具の全容（矢野環）大徳寺黄梅庵昨夢軒をめぐる（桐浴邦夫）紹鷗の茶室（中村利則）

第四部 武野紹鷗研究に寄せて

序文・書評・解題／系図類纂ということ（戸田勝久）戸田勝久先生著作目録（伊東明弘編）

▶A5判・614頁／定価12,600円

ISBN978-4-7842-1471-6

江月宗玩欠伸稿訳注（乾）

芳澤勝弘 編著

最新刊

江月宗玩の語録『欠伸稿』の龍光院蔵自筆本を翻刻。分量的には、影印で刊行されている写本「孤蓬庵本」のほぼ半分だが、「孤蓬庵本」にはない偈頌などを収録する。そのなかには私的なものも多く、江月の人柄を示すとともに、多くの文化人との交流を記録しているので、文化人の消息を窺う貴重資料ともなっている。口絵カラー4頁。

（坤は2010年春刊行予定）

よしざわ・かつひろ…1945年長野県生。同志社大学卒業。（財）禅文化研究所主幹を経て、花園大学国際禅学研究所教授（副所長）。

▶A5判・646頁／定価9,975円

ISBN978-4-7842-1462-4

茶の医薬史 中国と日本

岩間眞知子著

本書は、中国と日本の医薬書史料の影印を多数収録し、それらの史料から中国・日本の各時代における茶の様相とその歴史の変遷を明らかにする。口絵カラー2頁。

【内容目次】

- 第1章 茶の医薬史：中国編
- 第2章 茶の医薬史：日本編
- 第3章 茶の医薬史：論考編
- 第4章 医薬書史料（中国編・日本編）

▶A5判・526頁／定価9,450円

ISBN978-4-7842-1463-1

藤村庸軒年譜考（全2冊）

白奇顕成著

藤村庸軒（1613-1699）は、儒者・儒学者であり、漢学・和学にわたる広い教養と、卓越した美的センスにより、漢詩・和歌・作庭・花道・茶具の製作に才能を発揮した。多くの文人墨客との交わりをその詩集に書き残している。また、創意工夫による独自の茶の技を展開し、道としての解脱に至り、庸軒流茶道を完成させた。本書は、庸軒の生涯の動向を、文献学的方法にもとづき歳ごとに明かした異色の年譜考。茶道を軸とした近世文化史の魅力を余すところなく伝える一書。

▶A5判・総1,800頁／定価36,750円

ISBN978-4-7842-1456-3

尾陽 徳川美術館論集

徳川美術館編

最新刊第5号

徳川美術館が2005年開館70周年を迎えるにあたり、より多くの方々に徳川美術館の研究活動を知って頂きたいとの願いにより、徳川黎明会編の史学美術史論集『金鯢叢書』収録分から徳川美術館分を独立させて刊行。

- ▶第1号B5判・120頁／定価3,150円 ISBN4-7842-1222-1
- 第2号B5判・232頁／定価3,150円 ISBN4-7842-1240-X
- 第3号B5判・184頁／定価3,150円 ISBN4-7842-1331-7
- 第4号B5判・212頁／定価3,150円

ISBN978-4-7842-1406-8

第5号B5判・230頁／定価3,150円

ISBN978-4-7842-1474-7

禪語辞典

【7刷出来！】
入矢義高監修・古賀英彦編

禪語録中の難解な語句すべて（約5,500）について、平易なことばで解釈を施した画期的な辞典。中国語学究の第一人者である入矢義高氏監修のもと、古賀英彦氏が十年の歳月を費やして今ここに完成する。いわゆる漢文の語法では読めない口語の解説が備わり、禪宗寺院・茶道家・宗教史研究者は勿論のこと漢文を読むすべての人に必携の書。待望の増刷。

▶A5判・600頁／定価9,975円

ISBN4-7842-0656-6



書評・紹介一覧 3～5月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事〔敬称略〕
中世日本の政治と文化 (評)『日本歴史』732号(伊藤喜良)	近代工芸運動とデザイン史 (紹)『陶説』3月号(小野公久)	
室町・戦国期研究を読みなおす (評)『法制史研究』58号(伊藤俊一)	翁の生成 (紹)『歴史読本』54巻3号	
近代茶道の歴史社会学 (評)『社会学評論』59巻4号(竹中均)	ディドロとルソー 言語と《時》 (評)図書新聞 5/2(大嶋仁)	
中世蹴鞠史の研究 (評)『日本歴史』730号(渡辺融) (評)『史学雑誌』118編3号(辻浩和)	口頭伝承と文字文化 (紹)『月刊みんぱく』3月号	
東寺宝物の成立過程の研究 (評)『日本歴史』731号(阿諏訪青美)	幸田露伴の世界 (紹)朝日新聞夕刊 3/14	
近世吉野林業史 (評)『日本歴史』731号(脇野博)	日本古代都市史研究 (記)朝日新聞夕刊 4/11(天野幸弘)	
近世御用絵師の史的研究 (評)『日本歴史』732号(大倉隆二)	日光東照宮の成立 (紹)『神道フォーラム』26号	
みやこの近代 (紹)『地理』54巻(齊藤清嗣)	元三大師御籤本の研究 (紹)中外日報 4/25	
近代京都研究 (紹)『人環フォーラム』24号	朝鮮近現代史を歩く (紹)KOREA TODAY 393号	
江戸期文化人の死因 (紹)『日本歴史』730号	武士の精神(エトス)とその歩み (記)読売新聞 5/10(鷺見一郎)	
	魂の指定席 (紹)The Doshisha Times 5/15	

3月から5月にかけて刊行した継続図書

シリーズ名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	TRC	NPL	OPL	定価	発行月
佛教大学鷹陵文化叢書	20	20	朝鮮近現代史を歩く	1450-1 C1022	09015643	106376800	09928193	1,995	3
佛教大学研究叢書	3	6	金瓶梅研究	1442-6 C3090	09022075	106650700	10016590	8,925	3
御堂関白記全註釈	7	第2期第7巻	長和5年	1434-1 C3321	09020941	106639000	10011302	12,075	4
増補改訂 西村茂樹全集	7	7	訳述書3	1461-7 C3312	09022069	106652400	10006922	19,950	4
新島襄を語る	6	6	魂の指定席	1465-5 C1016	09025112	106696000	10060549	1,995	4
花園院宸記	18	28		1467-9 C3321				399,000	5
神社史料研究会叢書	5	5	神社継承の制度史	1418-1 C3321	09030950	106901700	10149953	7,875	5
金鯰叢書	35	35		1468-6 C3370	09032095			11,550	5
技術と文明	30	16巻1号		1470-9 C3340	09706650			2,100	5

3月から5月にかけて刊行した図書

図書名	著者名	ISBN978-4-7842	TRC	NPL	OPL	定価	発行月
日光東照宮の成立	山澤学著	1452-5 C3021	09014002	106281500	09878828	5,985	3
青島の都市形成史：1897-1945	樊玉璽著	1453-2 C3033	09015605	106281200	09928185	7,140	3
元三大師御籤本の研究	大野出著	1454-9 C3014	09015601	106372900	09928177	3,570	3
熊本藩の地域社会と行政	吉村豊雄・三澤純・稲葉継陽編	1458-7 C3021	09019089	106651700	09941477	9,450	3
中世史料学叢論	藤本孝一著	1455-6 C3021	09020900	106658800	10011310	9,450	3
漱石と世界文学	坂元昌樹・田中雄次・西横偉・福澤清編	1460-0 C3090	09022070	106653100	10006930	2,940	4
武士の精神(エトス)とその歩み	アレキサンダー・ベネット著	1426-6 C3039	09022093	106643500	10016608	5,040	4
日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚	松田利彦・やまだあつし編	1451-8 C3031	09022098	106662700	10025484	13,650	4
江月宗玩 欠仲稿 訳注 乾	芳澤勝弘編著	1462-4 C3015	09023349	106695200		9,975	4
茶の医薬史	岩間真知子著	1463-1 C3077	09025115	106685400	10071488	9,450	4
立憲国家中国への始動	曾田三郎著	1464-8 C3022	09030951	106901100	10134708	8,400	5

(表示価格は税5%込)

思文閣会館ご使用のご案内

思文閣会館には各種テナント、フリースペースなど、賃貸物件・日貸しスペースが各種ございます。

2F フリースペース：展覧会や講演会など
3F 多目的ホール：会議や勉強会、
 趣味のお稽古場、ちょっとしたお集まりなど

B1F：テナント募集中
 飲食店や雑貨店、
 倉庫などにご利用いただけます。

みなさまのご利用をお待ち申し上げております。



3F 多目的スペース



2F フリースペース

＜お問合せ先＞※窓口は思文閣美術館です。

〒606-8203 京都市左京区田中関田町 2-7

TEL 075-751-1777 FAX 075-762-6262

<http://www.shibunkaku.co.jp/kigyo/>

思文閣美術館ご案内

PLAIN PEOPLE アーミッシュの生き方

2009.5/2 sat.～8/2 sun. am.10-pm.5

休館日 月曜日(7月20日は開館)・7月21日(火)



【入館料】アーミッシュのバーレイジング(棒組) 2007年 画 山下謙里

一般：800 (650)円 高大生：500 (400)円
 小中生：300 (200)円 ※()内は前売・団体料金
 <前売券販売所>

ローソン、高島屋京都デパートショップ、
 大学生協京都連合、ジュンク堂書店(京都四条店) 他

◆7月12日(日)は、記念イベント開催に伴い、13:30～
 15:30まで、2会場あるうちの1会場を開場いたします。
 何卒ご了承ください。

アメリカで、文明の利器を使わず、今
 なお300年前の暮らしを貫くプロテス
 タントの一派・アーミッシュのライフ
 スタイルを、彼らの信仰生活に欠か
 せない聖書や、マーティスミラー(追
 害の歴史を綴った本)、アウスブント
 (宗教歌集)をはじめ、洋服・学校教
 材・おもちゃ・書籍・雑誌・生活雑貨
 などの資料のほか、彼らをモチーフ
 にした絵画作品や写真などを含む、
 約300点の展示でご紹介。アーミッ
 シュの人々の生き方や考えから、
 真の幸せとは、進歩とは何かを問う。



撮影：菅原千代志

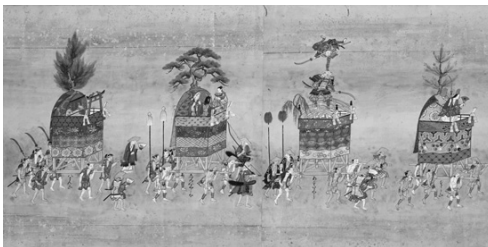
お問合せ

〒606-8203 京都市左京区田中関田町2-7
 TEL 075-751-1777 FAX 075-762-6262
<http://www.shibunkaku.co.jp/artm/>

思文閣出版古書部

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・
 錦絵などから学術書全般に至るまで、あらゆるジャ
 ーナルの商品を取り扱い、目録販売を中心に営業して
 おります。

※「思文閣古書資料目録」(年4回程度発行)をご希望
 の方は、古書部までお問い合わせ下さい。



十四日乃祇苑会

一巻

〒605-0089 京都市東山区古門前通大和大路東元町357

☎(075)752-0005(代) Fax.(075)525-7155

URL <http://www.shibunkaku.co.jp/>

e-mail kosho@shibunkaku.co.jp

▶ていたいむ余録◀

風俗画研究会では、一題につき発表は40分ほどで、
 これはあくまで素材提供とのことです。そこからの議
 論が長く、ときには2時間におよぶといえます。休憩
 そっちのけで、いろいろと資料を持ち込み、こんな史
 料もある、実はこれとこれはつながるんじゃないか、
 とりあがるそうです。お二人の出会いがロンドン
 だったというのは、この新しい研究会の可能性を象徴
 しているように思います。単なる寄せ集めや名ばかり
 の「学際」ではなく、分野・時代・地域が循環し、さ
 まざまな見方がお互いを高めていく、新しい学問が生
 まれる熱のようなものを感じました (h)

▶表紙図版◀

ケンペル『日本誌』所収長崎図(Engelbert Kaempfer,
 The History of Japan, 1727・個人蔵/『九州の蘭学』より)

▶営業部より◀

新型インフルエンザの騒ぎも一段落したところだ
 でしょうか。今回の騒ぎで、出店を予定していた学会が中
 止になるなど、小社も多少は影響を受けました。関西
 で広がりはじめましたので、東京の方面に出張に行っ
 た際は、なぜマスクをしていないの?と半ば冗談で問
 いかけられたりしました。電車に乗ると、マスクして
 いないと白い目で見られたという話も耳にしました。

ところで、アメリカでは日本でのマスク着用の映像
 を見て「日本インフルエンザ」と呼ばれているとか。
 日本のマスコミからも騒ぎすぎと指摘されてしまっ
 ましたが、今回の騒動の内実などは数年後に本にまとめられ
 て、刊行するのでしょうか。今を生きる出版人の一人
 として、今回の騒動は決して他人事ではないと考えま
 した。(I)

刊行図書目録の最新号(2009年版)をご希望の方はお申しつけ下さい。

株式会社思文閣出版

〒606-8203 京都市左京区田中関田町2-7 ☎075-751-1781(代) FAX.075-752-0723

<http://www.shibunkaku.co.jp/> e-mail: pub@shibunkaku.co.jp